

## 第5章 横穴式石室の再利用について

横穴式石室の再利用とは、古墳が築造された後に再び石室が墓地として利用されることである。その意味では連続して行われる追葬も再利用に含まれよう。また奈良時代から古代末期の初めにかけて火葬骨蔵器を埋納することも同様である。ただこれらは本稿で取り上げる古代末期の再利用とは地域的にも思想的にも異質と考えられるため今回は特に言及しない。

本稿では今回調査された板井砂奥古墳群の例など備中の資料を用い不明な点が多い古代末から中世にかけての墓制について若干の考察を行いたい。

板井砂奥古墳群のうち4・6・8・10号墳に古代末期の土器の副葬が確認できた。土器の時期としては今回総社市内の資料を中心に未発表資料を含めた編年試案<sup>(1)</sup>を提示したので、これに拠りたい。4号墳からは土師器の甕が2個体出土している。時期としては6号墳と同時期と思われる。6号墳からは、まとまった位置で内面黒色土器碗、土師質土器の坏、皿、土師器の甕が出土している。これらは10世紀中頃の土器組成の好例であり、皿がまだ残存するなど古代的な土器様相と言える。8号墳の内面黒色土器碗は施釉陶器の影響を受けた器形で10世紀前半中頃と考えられる。10号墳からは土師質土器の碗、坏、皿が出土している。時期としては9世紀の末頃と思われる。

以上が板井砂奥古墳群の石室再利用例であるが、土器から考えると10号→8号→6・4号の順に埋葬が行われたと思われる。時間的にさほどの空白期はなく、近接する板井砂遺跡の土墳墓から出土した内面黒色土器碗も11世紀前半と考えられるので、この丘陵一帯が平安時代を通じて墓域であったことが推察できる。

次に総社市内の横穴式石室の再利用例では、江崎古墳<sup>(2)</sup>、こうもり塚古墳<sup>(3)</sup>、千引2号墳<sup>(4)</sup>、カムロ15号墳<sup>(5)</sup>などがある。特に江崎古墳からは9世紀後半の須恵器双耳壺、緑釉碗が出土しており、他に例を見ない副葬品から考えて特別な身分の被葬者であったと考えられる。また10世紀末の内面黒色土器、土師質の碗、小皿も出土しており再度利用したものであろう。

こうもり塚古墳からは図3803～6が出土している。3の白色土師器碗<sup>(6)</sup>、4・5の小型碗は11世紀中頃、6の内面黒色土器碗は10世紀後半中頃であり、やはり最低2回の再利用が行われている。カムロ15号墳図3807～12でもやはり2回の利用が認められる。千引2号墳からは内面黒色土器碗のみが3個体出土している。

また総社市外の備中の例としては、倉敷市の大池上2号墳<sup>(7)</sup>から土師質の碗と内面黒色土器の皿が出土し10世紀中頃と考えられている。奥の池2号墳<sup>(8)</sup>からはやはり10世紀中頃の須恵器壺が出土している。他にも西坂古墳<sup>(9)</sup>からも内面黒色土器の碗が出土している。

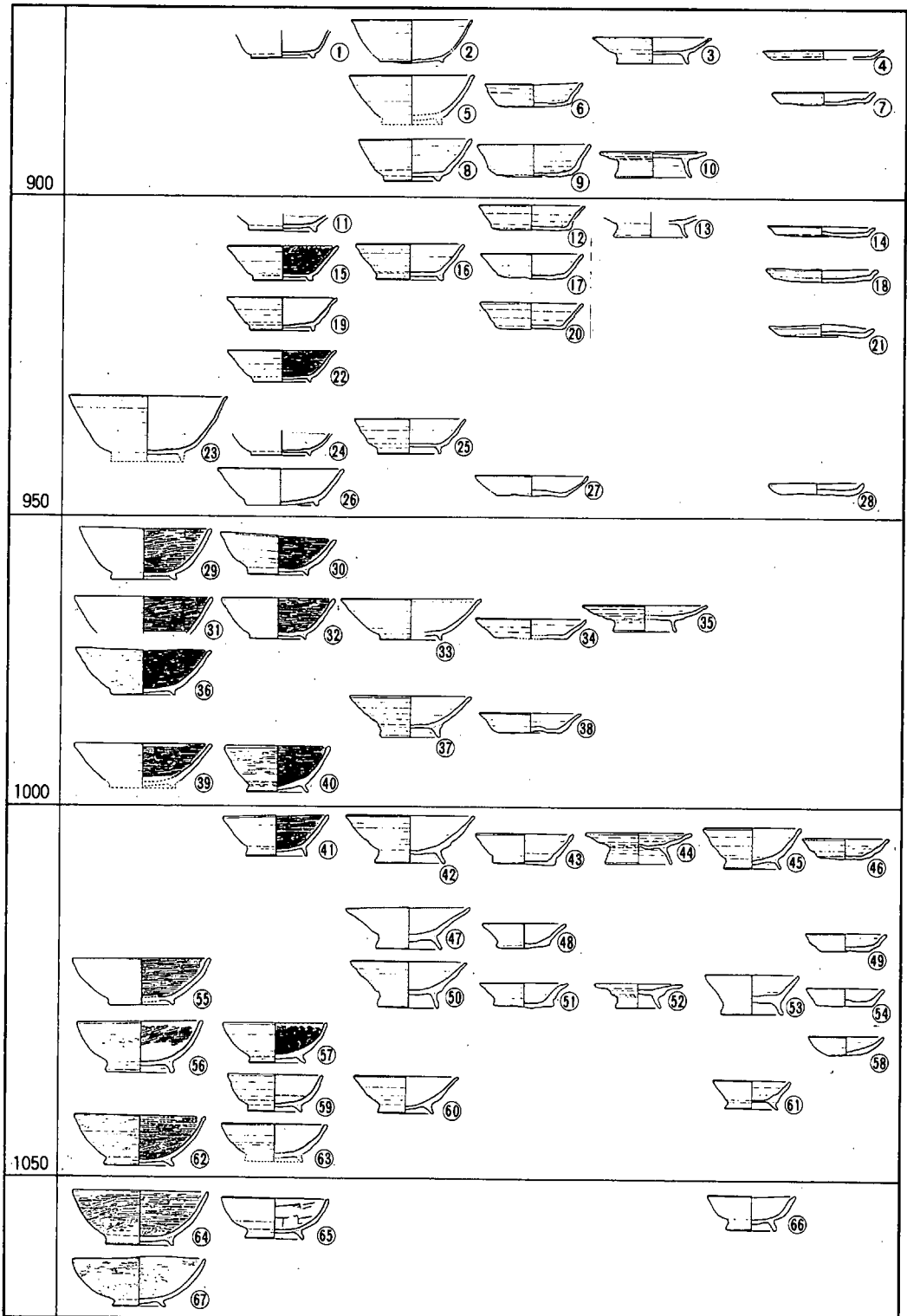
以上が備中に於ける古代末期の石室再利用例である。総社市に集中しているのは、古墳の密度が高く調査例が多いことにもよるが、国府の所在が推定されるなどこの時期の備中の中心地であったことによると思われる。

次に同時期の土墳墓であるが、先述した板井砂遺跡の土墳墓から内面黒色土器の大小の碗・土師質の小皿が出土している。真壁遺跡からは図3801・2の内面黒色土器碗が出土し、時期としては10世紀後半と考えられる。図38016・18は下三輪遺跡<sup>(10)</sup>の土墳墓より出土した白色土師器碗である。時期としては11世紀後半と思われる。他には窪木薬師遺跡<sup>(11)</sup>の土墳墓より10世紀前半の内面黒色土器碗、土師質の坏と皿が出土している。土墳墓の例は確実なものとしては備中では上記の例の以外に確認できないが、備前では山陽町岩田第17号土墳墓<sup>(12)</sup>から須恵器壺・土師質土器の碗、八稜鏡が出土している。岡山市七ツ坑古墳の土墳墓からも土師質土器の碗と坏が出土している。いずれも時期としては10世紀後半と思われる。このように県下の古代末期の調査例は非常に少ないため立地や集落との関係に言及するまでに至っていないのが現状である。

ここまで横穴式石室の再利用と土墳墓により古代末期の墓制の一端を概観してきたが、まず両者の副葬品の土器組成の差異について考えてみる。石室の再利用は当然空間を利用するので板井砂奥6号墳や江崎古墳のように甕や壺を伴っている。特に板井砂奥6号墳の甕は焼成後、底部に穿孔されており供献用の意味が強い。他の古墳でも盗掘等により掻き出されていた可能性が高く、6号墳と同様の碗・坏・皿・甕の組み合わせで副葬されていたと思われる。このことは空間を有する横穴式石室を利用した埋葬に際しては、ある程度石室を墓もしくは特別な祭礼の空間と最初から認識して副葬品を用意していたとも考えられる。

それに比較して土墳墓の場合は供膳具が少量副葬される場合が多い。しかし古代末期の備中では須恵器の供給はほとんどなく施釉陶器も貴重品であったと思われる。そのような事情にあって内面黒色土器は在地で生産される最良の器であり、出土量も土師質土器に較べて少量である。よってそれを有する土墳墓の被葬者が一概に石室利用の被葬者に劣るとも言い難く、地理的な検討が必要と思われる。このような最上の器の土墳墓への副葬はやがて中世に見られる。磁器碗の副葬へとつながるものと思われる。

最後に奈良時代の墓制との比較である。最近の総社市内での調査例<sup>(14)</sup>から得た資料によると奈良時代の骨蔵器が比較的高い標高の地点にある終末期の横穴式石室と近接して埋納される例が多いのである。これらの骨蔵器は副葬品は持たず簡単な石囲のみのものが多い。立地は展望のよい急峻な斜面で山の裾部にはまったく確認されていない。それに較べ平安時代の石室再利用の場合すべて平野に接する丘陵の裾部の石室に限られている。このことは奈良時代の火葬骨蔵器が火葬という行為と立地に仏教的な影響が色濃く反映されているのに対し、平安時代にはそれとはやや異った形態の葬送儀礼が主流となっていたと推定できる。以上古代の墓制の推

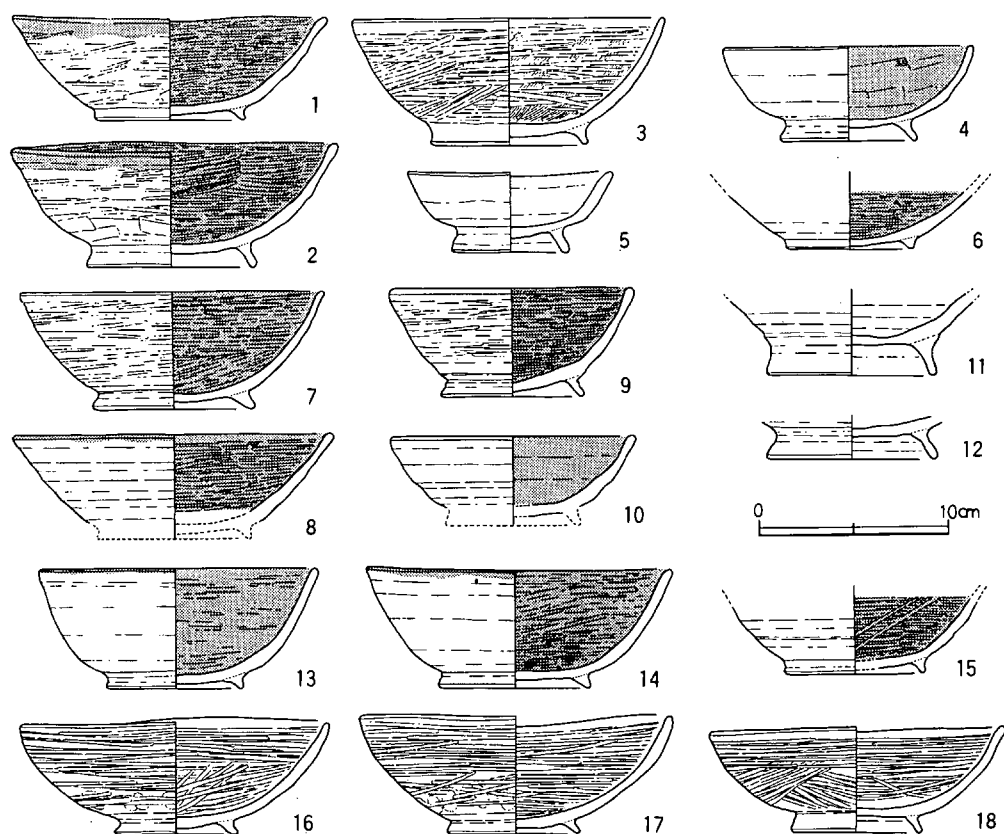


第379図 備中に於ける古代末期の土器編年試案

# 結語

移については大まかに推察したが、その葬送儀礼の思想的な背景については、まだ資料不足のため骨蔵器も含めた資料の増加を待って改めて論考したい。 (武 田)

①～④ 倉敷市，広江・浜遺跡。⑤～⑦総社市，板井砂奥10号墳。⑧～⑩矢掛町，毎戸遺跡。⑪～⑬総社市，樋本遺跡。⑭～⑯総社市，下三輪遺跡。⑰～⑱総社市，樋本遺跡。⑲総社市，板井砂奥8号墳。⑳～㉑倉敷市，広江・浜遺跡。㉒～㉓総社市，板井砂奥6号墳。㉔総社市，千引2号墳。㉕総社市三輪。㉖～㉗総社市，下三輪遺跡。㉘総社市，真壁遺跡。㉙㉚矢掛町，毎戸遺跡。㉛㉜総社市，カムロ15号墳。㉝～㉞総社市，林崎遺跡。㉟～㊱岡山市，天神坂遺跡。㊲～㊳矢掛町，毎戸遺跡。㊴結社市，下三輪遺跡。㊵～㊶総社市，板井砂奥。㊷～㊸岡山市，奥坂遺跡。㊹㊺総社市，カムロ15号墳。㊻～㊼総社市，こうもり塚古墳。㊽総社市，下三輪遺跡。



第380図 総社市内に於ける古代末期の土器

註

1. この編年表に使用した土器の詳細については本稿では言及しないが基本的には「岡山県における古代末期の土器様相」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』1990年に沿っている。
2. 江崎古墳調査団「江崎古墳」『総社市史』 考古資料編 総社市史編纂事務局 1987年
3. 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財調査報告』35 岡山県教育委員会 1981年
4. 鬼ノ城ゴルフ倶楽部造成に伴い総社市教育委員会が調査中である。
5. 註4に同じ
6. 従来「早島式土器」と呼称されていたが本稿では使用しない。
7. 間壁忠彦「王墓山遺跡群、大池上2号墳」『倉敷考古館研究集報』 10号 倉敷考古館 1974年
8. 福本 明「倉敷市奥の池2号墳出土の須恵器瓶」『倉敷考古館研究集報』 16号 倉敷考古館 1981年
9. 山陽自動車道の建設に伴い1984年岡山県教育委員会が調査
10. は場整備に伴い総社市教育委員会が1987年に調査
11. 河川改修に伴い岡山県教育委員会が調査中、調査担当島崎東氏に御教示を得た。
12. 神原英一朗「岩田古墳群」『岡山県宮山陽新住宅市街地開発事業団地内埋蔵文化財発掘調査概報』6 山陽町教育委員会 1976年
13. 「七つ坵古墳群」「七つ坵古墳発掘調査団」1987年
14. 註4に同じ